

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1920年代ロシア極東の博物館研究活動発展史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ルーバン, N. I. メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003995

1920年代ロシア極東の博物館研究活動発展史

N. N. ルーバン*

История развития исследовательской деятельности
музеев Дальнего Востока России и в 1920-х годах.

Н. И. Рубан

19世紀末に極東の大地がロシアの領土となると、帝政政府は各地域の生産力を向上させ、人材を開発する問題の解決を迫られた。そしてそのため、ロシア極東の各学会の事業と活動の活性化が図られ、総合博物館と学術図書館の開設が必要となった。こうした活動は、沿アムール地方の地理、自然史、経済状況の調査研究とその普及に大いに役立ったが、ロシアの資本主義の発展に刺激されて、ロシア帝国の商業と資源への関心も拡大した。

1917年までに、この地域では沿アムール地方各地域と近隣諸国の自然、歴史、経済を示す部門を持つ地方博物館が7つ創設されて活動していた。博物館の組織は、1890年代にロシア極東の各都市に設立されたロシア地理学協会沿アムール支部と他の支部の活動と密接に結びついていた。博物館は地方各地区（ウラジオストック地区、ハバロフスク地区、チタ地区など）の研究に従事するように要請された学会付属の研究機関として、また都市（ブラゴヴェシチェンスク、ニコラエフスク・ナ・アムール）の付属研究機関として創設された。これらの博物館は、学者や社会活動家の積極的な支

* N. I. グロジェコフ名称ハバロフスク地方郷土博物館長

1997～99年度文部科学省国際学術調査「北太平洋における先住民社会と交易に関する民族学的研究（研究代表者大塚和義）」の実施にあたり、ハバロフスク州郷土博物館スタッフと共同調査を行った。その際にハバロフスク州郷土博物館ルーバン館長ならびにコールネヴァ副館長らとロシアの博物館についての討論が行なわれ、それを契機に本稿が執筆された。

2001年3月に大塚がルーバン館長より原稿を受け取り、露文原稿の素訳を枡本哲が行い、さらに高島尚生が本館教授佐々木史郎の指導のもとに日本語の草稿を作成した。さらに用語などの点について佐々木と大塚が協議し完成稿とした。

Key Words : Russia, Khabarovsk, regional museum

キーワード : ロシア, ハバロフスク, 郷土博物館

援によって設立されたことから、主として公共的な（非国家的な）機関としての性格を持ち、学術研究を行うことを目的として、研究と文化啓蒙活動のために利用された。極東の博物館活動は様々な経済状況の中で確立された。それが高度に発展したのは、産業が最も発展した都市の博物館で、ハバロフスク（グロジェコフ名称博物館）、ウラジオストック、ブラゴヴェシチェンスク、チタ、キャフタの博物館がそれである。

20世紀初めまでに、博物館の活動は初期のささやかなコレクションの展示から大規模な学術コレクションのそれへと複雑な過程を辿って進展した。当初その発展は、沿アムール地方の初代総督とこの地方の調査に従事する組織や官庁の献身的な活動にかなり依存していた。というのは、彼らが、博物館活動の地方生活に果たす高度な役割と大衆化や自然条件の研究における博物館活動の意義を認識していたからであった。

1910年代末には、この地方の文化的のみならず社会教育生活までもが次第に極東の博物館に集中しつつあった。これらの博物館は啓蒙活動と学術活動の中心となり、それ故にまた、革命以前の沿アムール地方の生活上先進的な施設であった。20世紀初め頃にはできあがりつつあった極東の博物館網は、この地方の調査と研究資料の蓄積の面で社会の要求を満たし、訪れる人々をこの地方の調査研究に引きつけた。博物館は極東地方の自然、文化、歴史の学問知識の総合的担い手となった。

その後の出来事（1917年の革命と内戦）は極東の人々の、さらにはロシア全土の人々の平和な生活が作り出す自然な発展を乱した。ロシア科学アカデミー正会員のYu. A. ポリャーコフの比喩的表現にしたがえば、革命と内戦はロシア史上それまでにはあり得なかったほど深く国民の自己意識の野を掘り返してしまった。この出来事は古い社会に存在した弾圧と矛盾を映し出し、さらに必然的に新たな弾圧—より苛酷で、荒々しい弾圧—と新たな矛盾—より先鋭な矛盾—を生み出した。1917年とそれに続く時代の悲劇は人々にとって最大の衝撃であった。彼によれば、その衝撃は人々の生活を社会的、経済的、政治的に大きく変え、彼らの慣れ親しんできた伝統的基盤と概念を破綻させ、人々の間に未曾有の敵対関係を出現させたのである。

この時以来、博物館事業の展開に全く別の状況が生まれたが、それはまずヨーロッパ・ロシアで現れ、後に極東にも波及した。これらの状況は革命以前の博物館の歴史とは質的に異なっていた。この時代、あらゆる機関（首都でも地方でも）の活動が異常な性格を帯びていた。それは、革命とそれ以後の様々な出来事によって生み出された極端な情勢に影響されたからである。全体の活動プログラム、とりわけ、国家の維持管理が必要な記念物の公表と評価に関する学術的な基礎を持つ方法がなくなってしまった。内戦の状況下、教育人民委員部の下部組織にはその活動を中断したり、廃止

されてしまったりしたものもあった。しかし、組織活動の難しさもあったが、1920年末までには、中心的な指導部が教育人民委員部に集中している国家機関網を取り込んだ形で、博物館事業の経営システムができあがった。それによって経営管理の中軸が形成されるとともに、中央と地方支部とが結びつけられていった。

革命後の博物館事業の新しい展開を特徴づけたのは、一方で文化生活において前時代の傾向が継続されつつ、他方で新しい理念と事業計画が生まれて、ソビエト時代がそれを実現する可能性を開いたのであった。

ロシア極東における20年代初頭は、困難な経済・財政状況にもかかわらず、情熱的な研究者や啓蒙された地元の知識階層の力によって、博物館や学会、地理学協会による郷土誌研究活動は発展し続けた。早くも今世紀初めにはできあがっていた郷土誌研究運動は、社会主義建設事業における地元の特殊性の研究に直接関わるという点が認められて、国と共産党の指導部に支持された（Дневник 1922: 94-96）。

この国の経済状態が必要としていたのは、自然資源を調査し、生産力を配分するという課題を解決することだった。政治的状況においても、ソビエト国家の決議や決定、党の方針を住民の間に正しく伝えるための宣伝・煽動活動が必要だった。

過去に作りあげられていた郷土誌研究の基盤と革命直後の経済・政治状況は、極東だけでなく、国全体の郷土誌研究活動を発展させた。この時代の郷土誌研究組織の活動は国内における「黄金の10年」といわれ（Шмидт 1989: 14）、それらはS. O. シュミットのいう独自の「地方科学アカデミー」（Шмидт 1989: 15）へと発展していった。

20年代に極東の郷土誌研究の発案者であり、組織者かつ直接の参画者であったのは、V. K. アルセーニエフであった。この地方に最も通暁した1人として、彼は数々の中央および地方組織の顧問となり、極東地方計画局付属国民経済室の学術協議会書記となり、また、極東漁業局の海獣猟主任になった。1925年に彼は極東郷土誌研究組織によってソ連科学アカデミー200周年記念式典へ参加するためレニングラードへ派遣された。その時彼が直接参加した歓迎の祝辞の中で、アルセーニエフは、「…極東地域の無尽蔵の自然資源に関する調査研究には、将来に向けてこの地域の自然資源の埋蔵量と生産力を多少なりとも正確に見定める上で、その調査研究活動に並々ならぬ努力を費やす必要がある」（ГАХК: ф.662, оп.1, л.1）と極東地域の調査研究活動の重要性を強調した。

優れた郷土誌研究者の1人でありながら、彼はその後の自分の学術活動と実践活動をこれらの課題の実現に捧げた。極東地方の学会と組織の活動が、彼のもとで復活したばかりか、これまでに見たこともなかった規模となり、この活動にV. K. アルセー

ニエフは大きな情熱を傾けて参加した（Тарасова 1985: 276-277）。

地理学協会から生まれた極東の博物館は、この地域の学術研究の指導役となり、またこの国に生じたあらゆる変化を被り、20年代初めには、この地域の国民経済によって開発される自然資源およびエネルギー資源の調査を継続するように郷土研究の方向性が決定された。このことはこの時期の各博物館の発展過程がよく物語っている。

ロシア極東研究の最大の中心であったハバロフスク郷土博物館は、20年代初めに苦しい時期を味わった。最長老の郷土研究家 L. A. ヴォストリコフの回想によれば、博物館は「…苦難の時代に市政の取るに足りない補助金で営まれ、それによってなんとか貴重品を横領から守り、展示品を来館者が見学できるようにしておくことができたのだったが…」、そのまま放置されていたのである（Востриков 1990: 80）。

この時代に博物館を訪れたのは主として軍人たち、すなわち都市の最も組織化された住民であり、とりわけこの地方の自然と歴史を知りたいと思う人々であった。1922年のハバロフスク郷土博物館の状態を記した報告に、「ハバロフスクには、…博物館を訪れたことがない部隊は一つとしてないと断言できよう」と報じられているのも偶然ではない（ФККМ: ф.1, д.2, л.19）。

この頃、博物館は国立となり、1920年1月6日沿アムール州人民革命委員会人民教育部によって、政治的理由で博物館の組織者であり庇護者であった、沿アムール地方の旧総督 N. I. グロジエコフの名前が館名から削除された（ФККМ: ф.1, д.2, л.40）。博物館はその時代哀れな存在であった。博物館事業に専門の職員はおらず、館を維持する経費は限られ、革命後の地方都市ハバロフスクの厳寒に凍える状況下における仕事のために、この大規模な学術機関の活動は、その豊富な蒐集品の維持・管理と来館者関係の一般的な仕事をするにすぎないしかできなくなってしまったのである（ФККМ: оп.1, д.3, с.1）。

1924年のハバロフスク郷土博物館の危機的状況について、内戦後の博物館活動報告が物語っている。館長 N. N. レベディンスキーは館内業務に明るい唯一の人物で、同時に管理職と収藏品保存係を掛け持ち、博物館展示場の案内役も数多くこなさなければならなかった。博物館の部門の中で古銭古牌部門と地方史部門は閉鎖された。世界で3体保存されているうちの1体であるステラー海牛のユニークな骨格を含む多くの展示品は、屋根裏部屋に片づけられたり、事務局に保管されたりしていたし、他の部屋も収藏品に占められていた。館の建物は建設以来一度も修理されず、屋根は雨漏りし、漆喰が剥がれ落ちていた。博物館の収集活動は、地元住民によって届けられる若干の品物に限られていた（ФККМ: оп.1, д.3, с.6-10）。

館内に前向きな変化が始まったのは、極東人民教育部長 M. P. マルイシェフが、かつて 1910-18 年まで館長を務めた V. K. アルセーニエフを再び館長として招いて以後のことである (ФККМ: оп.1, д.3, с.3)。

V. K. アルセーニエフは有能な研究スタッフを組織し、考古学、博物学、民族学、鉱物学、植物学などの分野で博物館活動を行いうる熟練した専門家を、博物館業務とこの地域の研究のために招き寄せた。S. Ya. シズィフ、A. I. カルダコフ、N. A. セルク、G. E. ソリスキー、E. A. プレジェンツォフといった博物館の歴史に顕著な業績を残した専門家たちが、アルセーニエフのもとでそれぞれの活動を開始した。

V. K. アルセーニエフは博物館の再生と研究活動の組織計画の輪郭を描き、博物館として優先的に行うべき活動を学術研究、文化・教育、そして収蔵品保存の各活動と決めた。

学術研究活動には、収蔵品の記述と登録、展示作業、収蔵品の収集、他機関との学術交流があった。収蔵品の記述には館員ばかりでなく、国内の他の大規模な学術機関に所属する専門家たちも参加した。この時代にまず始められたのは収蔵品の目録化で、それには博物館収蔵品の百科辞典的構成ではなく、郷土誌研究的に構成される登録番号がつけられた。彼はこの地方の地理、産業・経済、地方史などの部門を創設する案を立てた。

V. K. アルセーニエフが博物館で活動していた時期に、時代遅れとなっていた展示は啓蒙主義的な原則によって構築された新しい展示に徐々に変えられていった。すなわち、展示により多くの説明文が付され、パネル、地図、模型、図画、写真その他の学術的に説明を補う資料が掲示された。また、博物館史上初めて収蔵品の学術的な収集作業の計画が作成された。

1924 年の博物館年報には、長い沈滞の後ハバロフスク郷土博物館で新たな再生運動が始まりつつあると書かれている。可能性が開けてきたことによって、未来に目を向け、ハバロフスク郷土博物館が活動を再開して近々新しく蘇る期待も膨らんだ。ロシア地理学協会極東支部、人民教育ハバロフスク地方支部も、博物館再生事業にすでに大きく貢献していたが、その後の学術的な企画でも博物館を支持することになる (ФККМ: оп.1, д.3, с.30)。

博物館員は郷土研究会、地理学協会、狩猟協会、海外文化交流協会など可能な限り協会や学会の活動に参加して、博物館の学術活動を発展させた。

1925 年 5 月にハバロフスクで極東郷土研究会議が開催され、博物館の活動報告を V. K. アルセーニエフが行った。そこで彼は、来館者を相手にする仕事の質は、博物

館収蔵品の記述の学術性に依拠していると述べた。彼の考えでは、博物館員はこれらの蒐集品に対して専門的な説明ができ、展示場の案内、講義、教育用の展示という仕事ができなければならない。V. K. アルセーニエフの発案によって、博物館の機能、義務および権利を定めたハバロフスク郷土博物館臨時規定が作成され、さらに博物館学術協議会規定や館員職務規定、勤務内規律も立案された。博物館の生活は次第に秩序立っていった。計画課題と館長の指示が遂行されているかどうかを監督する体制が作られ、学術協議会の会議では館員がきちんと報告を行い、統一された作業規則がしっかりと根付いていった（Григорова 1994: 95-97）。

博物館の物質的・技術的状态がその学術活動を左右した。1925年の年次報告の書類に V. K. アルセーニエフは、博物館の建物が設備的に整っておらず、博物館にそぐわないことを批判した。彼は次のように記している。

博物館と図書館用として特別な建物が建てられている。しかしながら、歴史的に芸術的な記念建築物でないだけでなく、外観からも内部の部屋の配置からも必ずしもそれに相応しい建物とはなっていない。この博物館の建築は博物館などというものは建てる必要がないといっているようなものだ。小さい扉、敷居、小さな窓、大きくない仕切り、水道・化粧室・従業員室の欠如、換気装置の欠落、どうしようもない暖房施設、木造螺旋階段・これらすべてが、博物館を建てたのは博物館事業に全く理解のない人々であることを物語っている。両方の建物が市の公園内にあり、それゆえに商業施設地域によって圧迫されている…。(ФККМ: оп.1, д.5, л.10)

この時代、館長職にあつては長期調査は難しく、したがって学術的な職務とはなりえなかった。館長の活動の帰するところはより行政的、事務的、経営的な仕事となった。このことと個人的な性格が理由で、ハバロフスク博物館での V. K. アルセーニエフの仕事は不可能となった。Ya. B. ガマルニクへの手紙の中で V. K. アルセーニエフはこう書いている。

…ハバロフスク博物館をわたしは軌道に載せた。今度はウラジオストックの博物館の役に立ちたい。ハバロフスク博物館の運営は今や誰か他の人でも難なくできる。一長一短はあるが、それでもやっていけるだろう。しかし、わたしの下書き原稿と測量図を整理できるのはわたし自身だけだ。わたしが死ねばわたしの資料も死んでしまう。(РГИА ДВ: ф.2422, оп.1, д.474, л.13)

これに対して極東革命委員会議長 Ya. B. ガマルニクは 1925年11月16日の極東人民教育部の文書に、郷土博物館長アルセーニエフ同志をウラジオストックの国立極東大学科学研究所への異動に障害はないだろうと報じた（РГИА ДВ: ф.2422, оп.1, д.474,

11)。この短期間のうちに、博物館は収蔵品の登録と学術的記述という大きな学術的事業を行い、多くの学術調査を実施している。博物館は研究施設として新たに蘇った。そして、この地方に関する学術調査研究が博物館事業の主要な方針となったのである。

1923年11月に教育人民委員部で開催された極東の博物館の状況に関する会議は、辺境地域の資源調査事業におけるウラジオストックの博物館が有する多大な学術的、啓蒙的意義を認め、ロシア地理学協会ウラジオストック支部から博物館を分離し、国家予算で運営する必要があることを承認した（РГИА ДВ: ф.2422, оп.1, д.12, л.67）。1925年2月17日の人民委員会議布告によってウラジオストック市郷土博物館は独立した組織に分離され、1928年に国立ウラジオストック州博物館となった。しかし、このような形で分離されたものの、地理学協会との間に数十年にわたって形成されてきた学術関係と密接な相互依存関係（共通の図書館、設備、専門家）があったために、博物館は長期にわたって独自に学術研究を行うことはできず、財政援助も必要として、依然として国立地理学協会ウラジオストック支部の完全な庇護下にあった（Архив ПКМ: д.4, с.40）。極東における4年に及ぶ内戦も博物館の厳しい財政・経済状況に直接影響した。博物館にはまだ規約はなく、管理運営は博物館の学識委員会に任せられ、自然史、産業・経済および文化史部門からなっていた。館長となったのは国立極東大学教授で人類学者のE. M. チェプールコフスキーで、収蔵品保存係と自然史部門の主任だった。産業・経済部門と文化史部門は同大学の教官が指導していた。

博物館の技術面の状態は学術研究活動を組織できるものではなかった。博物館の修理が緊急に必要だった。博物館の半地階の部屋は地下水で水浸しになり、春の数ヶ月は博物館の研究室やその他の研究目的に使用する部屋を利用できず、多くの壁が湿気に濡れ、漆喰が剥がれ落ちていた（Архив ПКМ: д.4, с.40）。費用の割り当てとして教育人民委員部に提示される予算は融資の裏付けがなかった。国立地理学協会ウラジオストック支部によって配分された経費では、漆喰が剥がれ落ちた建物外壁の角一つを修理できるだけだった。協会と個人的な寄付のおかげで博物館はそれでも収集を続けていた。

博物館の職員補充と学術活動の方針を特徴づける新しいコレクション蒐集品には関心を引きつけられる。1924年に収集されたものの中では、V. A. ルバンディン博士が寄付した祭具と日常生活用具を表現しているチュクチのセイウチの骨製品コレクション、N. M. ソロビョフが寄付した日本海産の貝類80種、日本の版画2点、マエヴォ¹⁾市民により寄付されたその他の品物、そして最後に貝類学の専門家ヴェリチュコフス

キーから譲渡された188点の淡水産貝と陸棲貝からなる標本コレクションを指摘できよう。注目されるコレクションは有名なV.M. サヴィチ教授率いる調査隊の植物標本によって補充されたが、それは沿海地方沿岸のボッチ川とコッピ川の渓谷で彼の調査隊の一員であったN.K. シシュキンにより採集された植物の葉の標本330点であった(Отчет о деятельности ВОГГО за 1924/25г.г. 1925: 6)。

博物館はこのようにして来館者と学界を展示資料の補充に引きつけながら、展示品を新しいものにしていった。動物学展示コーナーでは、V.M. サヴィチ教授指揮する土地管理局森林部調査隊員によりボッチ川とコッピ川で得られた植物標本やヘラジカ、クマ、ジャコウジカの剥製が展示された。

ウラジオストック博物館の収藏品総数は2万1,197点で、年間来館者数は1万3,418人であった。博物館は国立地理学協会ウラジオストック支部と密接な関係を保ちながら活動を続け、館員はこの協会員で、その学術協議会の会議に出席していた。博物館は以前のように郷土誌研究の方向性を帯び、あらゆる学校や沿海地方県立大学、国立極東大学、ハバロフスク郷土博物館、国立チタ博物館、沿海地方県立文書管理部、連邦科学アカデミー、中央植物園その他の学術研究機関と関係を持っていた(Дневник Всероссийской конференции научных обществ по изучению местного края 1921 № 3.: 33-35)。

ロシア地理学協会各支部の活動は、内戦のさなかに壊され、略奪された極東地方の博物館の再生を大いに促進した。干渉と内戦によって1891年に創設されていたブラゴヴェシチェンスク博物館の活動は現実には破壊されてしまった。市当局と人民教育部博物館委員会との間における政治上の意見の相違は、博物館のあらゆる活動をも断絶させることとなった。市立女子中学校の建物に博物館は落ち着いた。1922年に博物館が人民教育部の所管に移るとともに、収藏品の目録作成が行われ、展示品の状態と配置を向上させる方法が再編された。1924年初めにアムール県執行委員会によってその管理下に臨時施設が提供されるとともに、博物館業務が活発化し、それによって展示面積が広げられることになった。

しかしながら、ロシア地理学協会極東地方会議によって、国民経済のためにアムール地方の科学的かつ応用科学的研究をその目的とした経済学会が形作られるに相まって、博物館活動が活発になった。博物館の責任者である著名な郷土誌研究者V.M. ポポフはこの学会の理事会に入り、この自然科学者はアムール地方の自然界の調査やマラリア蚊とダニの生物学的研究、それらのアムール州内での生息分布範囲の確定に従事した。学術出版活動も活発となり、博物館と合同で『報告』4巻、『アムール県の

動物目録]などが刊行された。1927年頃には博物館に1万2,000点以上の展示品が集まった(Отчет музея 1924)。

1926年9月にロシア地理学協会地方会議によってロシア地理学協会ブラゴヴェシチェンスク支部が形成された。その設立発起人の一人であったN.I. プロホロフ教授は、9月12日に開催された第一回会議で協会の課題について報告した。この時からブラゴヴェシチェンスク博物館によるこの地方の自然と古代史に関する目的意識を持った計画的な学術研究活動が始まった。

博物館発展の新しい有益な段階は、有名な郷土誌研究者V.S. ノヴィコフ＝ダウールスキーが博物館長補佐の職務に就くとともに始まった。彼によって植物採集、沿アムール地方の考古学遺跡の研究調査が始められ、文献目録のカード化が行われた。研究調査の課題を実行しながら、博物館によって植物コレクション採集のための学術調査と、それに鉱物探査も行われた(Сб. «Да ведают потомки» 1991: 6)。博物館長に任命されたN.I. ポポフは、収蔵品の分類と登録、地理学や地質学、鉱物学、古生物学、植物学に関する研究活動を継続した。文化・歴史部門では民族学、考古学、銭貨学、歴史学に関する蒐集品が含まれていた。そしてすでに20年代中頃に博物館には、自然史部門(地質学、鉱物学、動物学および植物学)、経済部門(農業、金鉱業、地元工場生産)、文化・歴史部門(民族学、考古学、歴史学および革命史)の諸部門が形成された。このようにして20年代にアムール博物館は沿アムール地方の自然、歴史、生産力の調査研究を行う科学研究施設として新たに再生したのである。

ソビエト極東地方で成立した郷土誌研究活動はまとまりのない性格のものであったので、統一された行動計画を作成し、郷土を研究し普及する目的を達成するための努力を一つにし、現存する博物館の学術活動を今後も発展させる必要があった。

それゆえ、1925年5月22-24日、ハバロフスク市の極東地方行政センターで極東郷土誌研究会議が活動し始めた。会議を組織したのは極東人民教育部であった。その活動にはロシア地理学協会地方各支部、ハバロフスク市とウラジオストック市の博物館、極東計画委員会、国民経済室、極東郷土誌科学研究所の代表が参加した。会議に参加したのは、M.P. マルイシェフ、S. Ya. シズィフ、V.M. サヴィチ、S.S. バビコフらであった(ГАХК: ф.871, оп.1, л.4, л.13)。会議では、極東に協会のあらゆる学術機関を統合・調整するセンターの設立に関する問題が討議された。ロシア地理学協会地方各支部の報告が聞かれ、共同学術研究の統合と調整、それに遠方の地区に郷土誌研究の組織創設に関する新たな協会の課題が明確にされた。代表者は指導方針の意味内容を含んだ多くの報告を審議した。すなわち、「極東における科学研究活動の組織と

計画」(V. K. アルセーニエフ), 「郷土誌研究の学術組織と学校」(S. Ya. シズィフ), 「地方組織の出版について」(E. I. チトフ)である(ГАХК: ф.871 оп.2, д.4, л.5)。この地方の調査研究に関する活動の全体的向上を指摘しながらも、会議の参加者たちは支部間の結びつきの弱さやその行動の不一致に注目し、高度な専門性を持った専門家だけでなく、この地方の調査研究に関心を抱く郷土誌研究愛好家など幅広い層を郷土誌研究活動に引き入れるよう提案した。

郷土誌知識の宣伝センターである極東の郷土博物館の活動にも特に注意が払われた。博物館活動についての報告があった。すなわち、ウラジオストック郷土博物館長 I. V. パシュケヴィッチ, V. K. アルセーニエフの「ハバロフスク郷土博物館の活動について」, A. V. ハルチェヴニコフ「博物館活動の原則」である(ГАХК: ф.871, оп.1, д.4, л.7)。会議に参加した代表によって採択された博物館活動についての決議では、国民経済計画と関連してこの地方の実際的必要を反映するように博物館展示の建て直しの必要が強調された(ГАХК: ф.871, оп.1, д.4, л.7)。ロシア地理学協会極東地方支部は会議終了後、そこでの決定の実行作業を展開した。支部はシベリアのみならず、連邦諸共和国全域と外国にあるあらゆる学術組織と関係を結ぼうとした(ФККМ: оп.1, д.4, л.12)。それらの施設の多くがこれに応じ、多数の刊行物を送ってきた。そして、支部に郷土誌研究、特にまだあまり調査研究されていなかった極東の経済生活について多くの問い合わせがあった(РГИА ДВ: ф.2422, оп.1, д.444, л.178 об)。

会議の意義は、これが極東地方をあらゆる側面から研究する一貫した郷土誌研究活動の展望と、この地域の経済開発計画へ地域の資源を取り込むことを明らかにした点にある。会議後、ロシア地理学協会極東地方支部協議会は極東人民教育部と一緒にロシア地理学協会極東支部や郷土博物館の研究員と、会議で採択された決定事項について多くの協議を行い、この地方の科学研究活動を組織化する共同行動の足並みを揃えた。

会議の決定事項は極東人民教育部だけでなく、宣伝活動に従事していた党組織の活動の根幹に置かれた。全ソ連邦共産党ハバロフスク管区委員会宣伝部に情宣機関が創設され、これは1926年6月20日に「地方博物館の郷土誌研究活動に関して」問題を検討した。博物館長 K. Ya. ルクスは幹部会で発言し、郷土誌研究活動という場合個別の学問について言う必要はない、逆にこの地方の研究のためにはどんな学問も取り入れられなくてはならないと指摘した。つまり、博物館活動を学問的に形作る基本的思想を強調したのである。しかし、情宣部の指示にしたがって彼は地理学協会の再編を行うか、あるいは新たな郷土誌研究学会を組織するよう提案した。しかもその根拠

は、地理学協会が革命以前に設立され、「…帝国主義的な（モンゴル族などの服従）」目的を追求しており、「協会を今や根本的に改造しなくてはならない」という点にあった（ФККМ: ф.П2, о.11, д.19, л.5）。

情宣部はその決議でハバロフスク管区の郷土誌研究学会の下部組織を組織する必要性を認めることにした。これらの下部組織は労働者と農民、特に若者の間にこの地方を全面的に調査研究することへの関心を高め、ばらばらな文化の根源を統合し、蓄積された観察と知見をまとめ活用して、若い生徒や学生の間に自然科学への関心を高め、この関心を教育のために方向付けることを促しうるものだった。ロシア地理学協会支部の再組織あるいは廃止の問題は、地理学協会に関係する党最高機関の指示にしたがって解決することが提起された。

情宣部は「…博物館と博物館が組織する郷土誌研究活動を、…大きな社会政治的意義を有するしかるべき活動を組織するならば、大衆の文化啓蒙活動に最重要の意義を有するものと見なす」とも決議した（ФККМ: ф.п2, о.11, д.19, л.5）。このようにして1925年以来、博物館はこの地方の党組織の社会政治活動へと次第に巻き込まれていった。第一に、まさにこの機能を博物館に開かれる革命部門が果たすようになった。

ハバロフスク地方博物館での革命部門は1925年12月20日に開設された。その展示作業のための組織に参加したのは全ソ連邦共産党地方委員会十月革命史および共産党史資料蒐集調査委員会部で、そこにある資料を博物館に移管して展示するという臨時作業のために2人の職員を派遣した。彼らの援助を得て博物館の革命部門展示はなされたのであった。展示品の大半は写真、雑誌から切り抜いた石版画、葉書などであった。陳列ケースの一つは活版刷りと手書きの宣伝ビラ、新聞、パンフレットで満たされていた。展示品の中にはマグゾン駅でツアーリ軍将軍メッレル＝ザコメリスキーに射殺された革命闘士の墓から取り外された（小さな布切れの形の）黒旗があった。展示資料は革命の出来事を厳密に年代順に配置されてあった。デカブリスト、ナロードニキ、ロシア社会民主労働党の創始者たち、1905年ヨーロッパ・ロシアでの出来事、極東での1905年、反動時代の非合法活動、懲役と流刑、極東の1917年と1918年、全ソ連邦共産党と全ソ連邦共産青年同盟（コムソモール）の極東組織の歴史などである（ФККМ: оп.1, д.2, л.17-20）。

このような展示は学術的性格も人々の興味を引くアトラクシヨンの性格もなく、それゆえに来館者の関心を高めることにもならなかった。1925-1926年の館報には、「純粹に外側から見て革命部門は大量の単調な資料——写真、印刷されたテキスト——があったために、博物館の他の部門に比べて来館者には印象が弱く、「退屈」だった」

(ФККМ: оп.1, д.2, л.22)。このことを考慮して、8月15日以来任命された革命部門の新しい主任 M. P. ボクロフスキーは蒐集品を再分類し、新しい「物質的」品物でこの部門を補充することに取りかかった。この年の末には革命部門は、展示品が年初にはせいぜい600点であったものが、850点にまで増加し、極東の人々の革命教育に向けて活動し続けた。20年代末頃、ハバロフスク郷土博物館は指導的中心であり、極東地方では最大の郷土誌研究博物館となった。この頃には11の部門があり、それは地質学、鉱物学と古生物学、植物学、動物学、考古学、民族学、ハバロフスク地方とその隣接諸国の歴史、古銭学、写真、革命などの部門であった。このような部門の必要性は、沿アムール地方の最古の歴史と原住民族の民族誌のさらなる研究に志向された博物館の幅広い学術活動によって引き起こされた。原住民族の文化と日常生活の研究の必要性は、彼らが自然資源とその利用方法、原住民の文化と生活様式の特異性に高度に通暁していること、それに諸民族を「プロレタリア文化」に親しませる必要によって引き起こされた。1928年に限ってみると、ホル川流域に居住するオロチ、ウデへの民族学調査が2回と、他にはアムール川下流域に居住する他の民族の芸術に関する調査とフォークロアおよび統計資料の収集が行われた。芸術部門の調査(P. M. パクロフスキー)が実施されたが、この調査ではゴリド、ギリヤーク、ウリチなど極東少数民族の造型芸術資料の収集が行われ、考古学調査(考古学者 N. G. ハルラモフ)がトゥル村それにツングースカ川流域でも行われた(ФККМ: ф.1, оп.1, д.3, л.6)。博物館では常設展示の他に郷土誌と学術的テーマを扱った様々な特別展示が活動し続けた。1929年に芸術部門の部屋では郷土誌学会芸術部門と共催で地元芸術家の作品展が組織され、国立音楽財団から得られた陶磁器コレクションが展覧された。しかしこれらの展示と並んで、博物館の活動には政治性を帯びた展示——中国における革命運動史、反宗教展——が徐々に根付いていった。

博物館では啓蒙普及活動が継続され、活発に展開した。それは学術展示ホールのテーマ別見学の実施であったり、教師や生徒、学生および赤軍兵士の間で博物館研究員が講義や報告をしたり、郷土誌学会の講習会で報告が行われたり、コレクションの収集問題に関する調査活動に見られた。このような活動形態によって聴講者は増加し、郷土誌に関する知識の普及を促進した。

極東郷土誌学会や極東の他の博物館を含む東洋学会支部、郷土誌研究所、太平洋狩猟漁労局、地球物理学測候所との頻繁で緊密になった学術関係は、博物館を発展させ、その活動の学術的編成をいっそう充実させるのに役立った。博物館が科学アカデミー極東支部の所管にあり、そこの研究員が支部の学者や専門家といつも接触して仕事を

していたこともこのことを促進した（ФККМ: ф.1, оп.1, л.3, л.6-7）。それは研究の質の高さ、研究されている問題と課題の緊要性をもたらし、またこの地方における研究活動を連携させた。学術コレクションの多種多様な内容は多くの研究者と郷土誌家の関心を引き起こし、それらの非常に深い学術研究と記述を可能にした。この点から見て最も価値ある資料としては、民族誌部門のコレクション、とりわけ満州・ツングース諸民族とパレオアジア諸民族のシャーマニズム信仰の珍しい器物、衣類、樺皮容器、装飾品がある。民族誌部門では、ゴリドやオロチ、ウデヘ、オリチ（ウリチ）、ツングース、ラムート、ヤクート、ギリヤーク、アイヌ、コリヤーク、チュクチなど沿アムール地方諸民族の文化が展示され、その収蔵品は約 5,000 を数えた。隣接諸国部門で充実しているのは、珍しい青銅製仏像コレクション、漢人の金糸縫い絹衣、日本の侍の甲冑、朝鮮族衣装他で、保管点数 347 であった。

ユニークな動物学コレクションはこの地方の自然界の研究にとって認識度の高い意義があるもので、来館者だけでなく、極東の研究者の関心を高めた。コレクションには大半の土着の大形小形ほ乳類—虎、ヒョウ、シカ、クマ、クロテン、ラッコ、アオギツネ—の剥製があった。動物学部門にも、ステラー海牛のほぼ完全な骨格、クジラとシャチの骨格、鱈脚類（セイウチ、アザラシ、オットセイ、トド）の剥製といったユニークな品物があった。

極東タイガの調査研究と全連邦の目録編纂に非常に重要なのは、博物館創立の日以来収集され、極東の植相（満州植相の研究地域）の比較的完全な保存状態のよい 2,500 点以上の植物標本で、科学アカデミー出版になるロシア植相植物標本集に収められているものである。

博物館は 1925-1926 年頃、非常に程度の高い学術研究の方向性に達した。博物館では極東各地の鉱石標本を含む地質学、鉱物学および古生物学部門の豊富な蒐集品、特にカヴァレロヴォ産地のテチュヘ川産銀・鉛および亜鉛鉱物の標本コレクションが展示された。標本はこの地域の自然資源開発地域の調査研究とこの地方における生産力の将来の発展の展望を分かり易く展示した。特に地元の見学者の関心と呼んだのは、早くも今世紀初めに博物館に収められたマンモスの頭蓋骨、サイと化石ウシの若干の頭蓋骨、少数ではあるが絶滅した爬虫類トラホドンの細骨骨といった、ユニークな古生物学コレクションである。

この時代、博物館は計画的な考古学研究と沿アムール川流域原始古代史調査を開始し、考古学遺跡で保存活動を実施した。アムール川を跨ぐ鉄橋建設時に発見された出土品（土器、中世武器・武具など）、チェルドイモフカ河畔やインノケンティエフカ

教会付近の発掘調査、埠頭側の鉄道支線建設時、アムール川の春季雪解け増水時の冠水地帯やその他多くの考古学遺跡で発掘された出土品が博物館の収蔵品に加えられた。

この時期、博物館によって重要な学術的普及活動が実施されたが、それは蒐集品の体系化と整理、標本収集作業の指導、講義や見学案内、助言、郷土誌研究に関する個別の問題について研究員と協議する場を組織することであった。博物館学術協議会は積極的な役割を演じ、博物館の学術的および文化啓蒙のために当てられた資金を配分した。具体的には博物館学術活動を立案し、博物館と図書室の新たな蒐集品と書籍の補充を検討したのだった。

20年代末に博物館の学術および文化啓蒙活動は著しく高まった。ハバロフスク博物館は多くの地方施設および組織と関係を保ち、またその他の都市の郷土誌研究下部組織とも関係を持ち、カムチャッカの郷土誌研究サークルやスヴァボードヌイ市に学校付属郷土博物館を組織しようと考えている教師や郷土誌家と文通した。1926年4月に博物館はこの地方の生産力の調査に関する極東会議に参加し、会議の組織セクションで博物館の学術協議会書記 S. Ya. シズィフは「極東地方の調査研究における博物館の役割」というテーマで報告した。また館長はこの地域の生産力の調査研究に関して最優先すべき博物館活動を決定し、学術研究が博物館活動の主要な方向となった。

V. K. アルセーニエフに代わって館長職に就いた K. Ya. ルクスは博物館と学術活動に関する規定を立案し決定した。1927年 N. N. ビリーピンは学術研究を継続した。それによって博物館の物質的基礎が強化され、24以上の郷土誌研究下部組織とサークルが組織され、この地方の調査研究に積極的に組み込まれた。博物館研究員はソ連科学アカデミー民族学博物館、科学アカデミー動物学博物館、植物園の学術調査に参加した。博物館は自国のみならずアメリカ合衆国、日本、中国の学術施設と文通した。

この時期にこの地方の党組織と極東十月革命史および共産党史資料蒐集調査委員会の博物館活動への影響が強くなり始めた。革命部門を博物館に開設するという教育人民委員部の指令を実行するにあたり、この部門の展示スペースを確保するため、博物館は芸術部門の一部の絵画をハバロフスク師範学校や州ソビエト党学校、極東人民教育部などへ移した。しかしながら、このやり方は様々な施設に絵画を分散させることになり、その後、絵画は損傷や全壊の危機に脅かされた。絵画ギャラリーの閉鎖は来館者、特に学校職員側からの不満を引き起こし、絵画ギャラリーの再開の必要が述べられたが、実際に再開されたのは、極東で活動し、その遺産を国家に寄贈した著名な画家故 V. G. シェシュノフの一大絵画コレクションがハバロフスク博物館に譲渡さ

れてからであった。郷土誌研究にとって意義を有する彼の絵画は博物館に譲られて保管された。そしてこれに関連して極東人民教育部はハバロフスクに博物館の独立部門として画廊を開く決議をした。この画廊のために総面積 310 m² の、旧ユダヤ人教会の建物が与えられ、ニコリスク＝ウスリースキーから V. G. シェシユノフの絵画、デッサン、図画 1,000 点以上が移された (ФККМ: ф.1, оп.1, д.3, л.23-25)。

このようにして 20 年代末に沿アムール地方になくはならぬ部分、つまりこの地方の特徴、すなわち住民の生活の様々な側面や自然など、その豊かな歴史をつくってきた博物館の発展した科学研究や文化啓蒙活動は、政治的啓蒙活動に譲歩して、次第に低下し副次的なものとなった。20 年代後半はこの国の文化的生活上、全ソ連邦共産党の政治的啓蒙活動と宣伝活動活発化への傾向が強まったことが特徴である。これは郷土博物館と教育人民委員部諸施設の活動の政治色強化を引き起こした。この時から次第に博物館の学術および展示活動に対して党と国家の組織が介入していく様子が見られる。たとえば十月革命 10 周年への準備期に、ソ連邦中央執行委員会幹部会付属特別委員会博物館部は、革命博物館にならって、革命と内戦そしてこの地域の社会主義建設をテーマとした展示と展示部門を、州、地方その他の博物館に組織するよう勧告した。極東の学術施設・博物館・科学芸術施設本部全権 N. N. ビリーピンの極東の各博物館宛て回状には、博物館に存在する革命部門あるいは革命コーナーは「これらの部門に国民的展示会の形を与え、かつ最大の先見性を備え入念に演出して、来るべき秋のあいだ最も幅広い層の大衆を参加させる必要がある」(АПОМ: ф.2, д.1, с.18) と述べられていた。

この時期までに、ハバロフスク、ウラジオストック、ブラゴヴェシチェンスク、チタなどの都市の博物館には国家と党機関、極東十月革命史および共産党史資料蒐集調査委員会部の特別な管理のもとに革命部門と革命コーナーがすでに開設されていた。それらはすべて一つの目的——十月革命の理念、内戦史、全ソ連邦共産党創立史の宣伝——に統合されていた。地方郷土博物館は、全ソ連邦共産党地方委員会十月革命史および共産党史資料蒐集調査委員会部の情宣部の考えによると、まずなによりも政治宣伝施設となる必要があった。その主要任務は大衆を共産主義イデオロギー精神へ教化することでなくてはならなかった。しかも「…何がなくてはならないかという視角のもとで、何があったか、何があるのか」ということをはっきり目に見える形で知らしめる特別な方法によってであった。「大衆の組織的思考のための橋頭堡」としての博物館という新たなイメージが次第にできあがっていき、そのうえ極東人民教育部自身が「情宣本部」のようなものに形を変えていったので、「…博物館の指導は党の同

志の手慣れた巧みな手中に収まることにならなければならないのである。」(ОПИ ГИМ: ф.54, д.559, л.167) 極東の学術施設・博物館・科学芸術施設本部全権 N. N. ビリーピンは、これを指針としながら、この地方の各博物館へ指令書簡を送り、その中で1928年に革命史上意義ある記念物の保存問題が特に重要性を得たことに対して博物館指導部に注意を払わせた。極東人民教育部は、極東地方の各博物館、たとえばチタ、ブラゴヴェシチェンスクの博物館が、一般的に国内の古い記念物の登録と並んで、革命記念物の登録に注意を払わなかったことを指摘した。これによって博物館学術協議会はこの問題を審議し、その決議録を極東人民教育部へ送付するよう提起した。書簡では、この種の会議へパルチザンや内戦参加者、十月革命参加者、諸事件の目撃者を招き入れることが重要であり、成し遂げた仕事については絶えず通報することが重要であると強調された(ГАХК: ф.871, оп.1, д.5, л.1)。学術施設・博物館・科学芸術施設本部全権は、説明書—革命記念物一覧「草案」—を追加送付し、各博物館がその地域に現存するすべての革命・内戦記念物をその一覧に加え、この作業を最も不可欠かつ重要な作業と見なし、それらの状態を記述するようにさせた(ГАХК: ф.871, оп.1, д.5, л.3)。

1928年以後、政治色強化の傾向は実際の博物館活動に徐々に定着し始めた。革命部門の展示の準備がありとあらゆる学術的かつ芸術的検討を排除しつつ急がれ、純粋に形式的ないし記念祭的性格を帯びていた。どの博物館も成し遂げた仕事について極東人民教育部へ報告した。「博物館にパルチザン活動10周年と赤軍11周年記念日に向けての展示が開設されていることをお知らせします。展示の「呼び物」の1つから写真を貴殿に送付します。それは「タイガのパルチザン」というタイトルの写真で、来館者の関心を引きつけ、際限なく話が弾みました。」クズネツォフ名称チタ博物館長 P. オクンツォフは極東人民教育部 N. N. ビリーピンへこう報告した。「底の浅いケースに砂を入れて、その砂と石で山や塹壕を築き、苔や草、小枝などでその他のものを表現し、パルチザンが日本兵や白軍と戦った戦闘の概観を示そうと思います。戦闘兵は、しかるべき方法で色づけした錫製人形の兵士か、厚紙を切って作った兵士で作ります。これは安くつきますし他に例のない独特なものになります。」(ГАХК: ф.704, оп.1, д.23, л.25) 歴史の評価とそれに相応しい博物館の活動のこのような志向は、1929-1930年のロシア・ソビエト連邦社会主義共和国教育人民委員部や学術施設・博物館・科学芸術施設本部の決議と指令により決定され、博物館活動において新しい方向を反映させ始めた。学術研究活動と収集活動への注意が同時に低下したにもかかわらず、共産主義イデオロギーの大衆宣伝の組織化には殊のほか注意が向けられた。

博物館は国内のあらゆる政治キャンペーンの参加にも、工業化や集団農場建設、新しい社会主義生活のプロパガンダにも、反宗教活動にも「動員された」のである。たとえば、教育人民委員部学術施設・博物館・科学芸術施設本部長 A. A. ヴォリテルの1928-1929年管理運営活動に関する論文要旨には、学術施設・博物館・科学芸術施設本部の諸施設が、「ソビエト改選や収穫率の向上、反宗教プロパガンダ、国債、5カ年計画宣伝、秋季播種キャンペーンなどに関するノルマ遂行突撃キャンペーンに参加した」（ОПИ ГИМ: в.54, д.556, л.1）と述べられた。

博物館の展示で歴史上の出来事を評価する際、政治的志向に続いて同時に階級志向も反映されるようになった。博物館職員と教師を前にしての演説「極東地方史の大衆による研究組織について」で N. N. ビリーピンは強調した。「トルストイ伯爵と人民の意志派革命主義者、利口ぶった地主とカラ徒刑監獄の囚人たち²⁾——これらは最も際立った例だ。前世紀の80年代ロシアにおける階級闘争のほんとうに誰の目にも明らかな、最も力強い例だ。」さらに、大衆による歴史の研究とその記念物の保存を組織するという問題提起を含んだ課題を展開する中で、レフ・トルストイやカラ徒刑囚のような闘争を行った階級代表者の記念物の状態に対して一様な態度で臨んではならないと彼は断言した。報告者は「人民の意志派にとって階級の敵である L. N. トルストイ」の物質的記憶を保存する必要性を疑問視し、「カラで非業の死を遂げたニコライ・アンドレーヴィッチ・イシューチン——ツァーリとの組織的テロ闘争の先駆者——の墓の状態」のことを嘆いた（ФККМ: д.1, оп.4, л.7-9）。

博物館事業、とりわけ記念物保存問題に見られる革命イデオロギーの案内人というこうした立場は、極東の博物館の展示展覧活動と記念物保存活動に次第に根を下ろし始めた。この国に形成しつつあった全体主義的メカニズムは社会を諸階級に分け、それら階級間でプロレタリアートの敵対階級による支配に対して熾烈な克服闘争を行い、歴史的記念物の保存を犠牲にした。その例が極東の学術施設・博物館・科学芸術施設本部全権の立場であり、1927年12月に第三回全ロシア郷土研究会議が歴史的遺物であるモスクワの赤橋撤去に関し抵抗した事実を彼は引き合いに出している。「…革命家たちの墓地では家畜が放牧され、数千に及ぶ輝かしい革命家の墓の中で見捨てられずに残ったのはほんの少数だ、だが郷土誌研究は沈黙していた。」

それにしたがって、地域史を殊さら政治的出来事を誇示する方へ反映させる方向へと転換することに、各博物館も同程度ではないが反応した。極東人民教育部の記念物登録規準に関する書簡で、管区人民教育部の地方博物館がこれを否とする返答を送った。サハリ管区人民教育部は「著名な旧徒刑センターから」を書いた（1927年8月

29日付第10835号)。それによると、「往古の記念物はサハリンには存在しない。」スレテンスク管区人民教育部の返答(1927年7月23日付第73-45-2号)は、「記念物は数えられない。しかも旧徒刑地の建物を数に入れなければ、こちらの管区にはそのようなものはないようである。」

テーマ別に決議を立案する際、歴史的事件の評価に対して階級的アプローチが極東の博物館に無理やり押しつけられた。極東人民教育部の回状にはこう報じられた。「極東地方の歴史は暗黒である。それについての作業は取るに足りないレベルな推測以外、ほとんど行われなかった。しかしながら極東は階級闘争の一種独特の形態、しかもロシア革命史全体にとっても極めて本質的な形態の一角である…。この研究されていないという否定的な影響の大きさの方が、単なる歴史の無知以上に計り知れないほど面倒だ。この地方の歴史に関するいかなる表面的な理解であっても、われわれの思想的素養の切り離すことのできない属性である。」(ФККМ: д.1, оп.4, л.7-9) 教育人民委員部は、「歴史の最前線に階級勢力を動員しつつ」、博物館活動への支配的影響を小ブルジョアジーが有し、それがほとんど区別なく各学会に支配的であり、博物館事業の面から歴史全体に対して影響を持っていることに注意を集中するよう博物館に指示した。

郷土誌研究組織とその中心機関——極東における革命的改造と内戦の結果という状況下の郷土博物館——の活動は、非常に苛酷な道徳的、経済的、政治的状况にもかかわらず、19世紀末から20世紀初めに形成された科学研究的郷土誌研究の方向性を失わなかった。それはロシア地理学協会各支部やその往時の知識階層の功労者、その他学術組織、郷土誌研究組織が失わなかった積極的活動によって可能となり、郷土博物館網の発展が伝統的な学術研究および文化教育活動の方向の中で継続していった。

この時期までに極東地方で活動していたのは、地理学協会のザバイカル、ウラジオストック、アムール、ハバロフスク、ユージノ・ウスリースク各支部で、全体で929人であった(Научные новости Дальнего Востока 1930 № 7-8: 7)。それはまさに学者、研究者、学界と社会の権威、郷土誌家、自然や科学、技術といった様々な分野で最新の学問的発見と研究の普及者であった。彼らこそ貴重な歴史遺産——19世紀末に創造され、その後発展した極東の博物館網——を守ってきたので、党とソビエト諸機関は彼らの活動と郷土誌研究の中心——郷土博物館——の活動に特に注意を向けていた(ГАХК: ф.341, оп.1, д.447, л.13)。国民経済的性格を有する関心とソビエト啓蒙活動の関心が、地域の博物館網の発達と並んで、博物館活動の方向性をも根本的に変える権力を組織した。

しかしながら、すでに20年代末までにソビエト国家の文化生活に、旧来ロシア知識階級が慣れ親しんだあらゆる郷土誌研究活動の伝統的方向性を中央集権化せんとする、国家および党の指導部と結びついた、以前には博物館に特有ではなかったいくつかの変革が生じている。博物館網が進歩的な学問的知識階級や郷土誌家層を統合し、住民の間に権威と人望を集めていたからこそ、博物館網は政治目的およびプロパガンダの目的で、特にイデオロギー闘争の先鋭化や社会諸科学における根本的改造をめざすという状況下で次第に利用されるようになった。その結果、博物館には科学研究的性格を有する博物館活動という以前の目的を排除する、以前には見られなかった、全く新しい課題ができつつあった。学問的な郷土誌研究とはあまり関係のない、成し遂げられた革命のプロパガンダのため、集団農場運動の発展、全ソ連邦共産党のイデオロギーの諸問題や社会主義建設その他に反映させるためにその課題は向けられた。

20年代から30年代のはざまに博物館活動発展の科学的、創造的方向は終わりを告げ、マルクス・レーニン主義に基づいて、旧来の展示を強制的に破壊し、新しい展示を創り上げる時期が到来し、それに続いてロシア極東の博物館網全体と郷土誌研究活動の完全な再編が続いた。この再編は矛盾に満ち満ちたものであったが、そのすべてが時代の精神、具体的な歴史の一時期の精神に呼応したものだだった。

注

- 1) レニングラード南方の都市（訳者）
- 2) 帝政ロシア時代、ザバイカル地方のカラ川の川辺にあったネルチンスク徒刑監獄群の一つ、そのカラ徒刑監獄で政治囚が当局の態度に対し抗議を起こしたり、体罰に対し集団自殺したりした。（訳者）

文 献

（著書・論文）

- Востриков Л. А.
1990 *И привести в известность край...: Из истории Приамурского (Хабаровского) филиала Географического общества Союза ССР.* Хабаровск.
- Григорова Л. К.
1994 В. К. Арсеньев—директор Хабаровского краевого музея (сентябрь 1924—декабрь 1925 года). У11 *Арсеньевские чтения.* Уссурийск.
- Тарасова А. И.
1985 *Владимир Клавдиевич Арсеньев.* Москва: Наука.
- Шмидт С. О.
1989 Краеведение—дело, значение которого не может быть преувеличено. *Альманах Памятники Отечества.*

(その他の文献)

- 1991 Сб. «Да ведают потомки» Благовещенск.
 1921 Дневник Всероссийской конференции научных обществ по изучению местного края. № 3. Москва.
 1922 Дневник 1-й конференции по краеведению. № 5. Москва.
 1924 Отчет музея 1924 г.
 1925 Отчет о деятельности ВОГГО за 1924/25г. Владивосток. (Архив ПКМ. Годовой отчет за 1924/25 г.г. д.4, с.43).
 1930 Научные новости Дальнего Востока. № 7–8.

(古文書)

ГАХК

- ф.341, оп.1, д.447, л.13.
 ф.662, оп.1, д.1, листы не нумерованы.
 ф.704, оп.1, д.23, л.25.
 ф.871, оп.1, д.4, л.7.
 ф.871, оп.1, д.4, л.13.
 ф.871, оп.1, д.5, л.1.
 ф.871, оп.1, д.5, л.3.
 ф.871, оп.2, д.4, л.5.

ФККМ

- д.1, оп.4, л.7–9.
 ф.1, д.2, л.19.
 ф.1, д.2, л.40.
 ф.1, оп.1, д.3, л.6.
 ф.1, оп.1, д.3, л.6–7.
 ф.1, оп.1, д.3, л.23–25.
 ф. п.2, о.11, д.19, л.5.
 оп.1, д.2, л.17–20.
 оп.1, д.2, л.22.
 оп.1, д.3, с.1.
 оп.1, д.3, с.3.
 оп.1, д.3, с.6–10.
 оп.1, д.3, с.30.
 оп.1, д.4, л.12.
 оп.1, д.5, л.10.

РГИА ДВ

- ф.2422, оп.1, д.12, л.67.
 ф.2422, оп.1, д.444, л.178 об.
 ф.2422, оп.1, д.474, л.11.
 в.2422, оп.1, д.474, л.13.

АПОМ

- ф.2, д.1, с.18.

ОПИ ГИМ

- ф.54, д.559, л.167.
 в.54, д.556, л.1.

Архив ПКМ

- д.4, с.40